

機関車のお医者さんへ

(故中島次郎を偲ぶ短歌／俳句集)



- | | |
|--------------------------------|------------|
| 1 婚約を告げらるる父の狼狽と静かに語る母を見ている | 1974 |
| 2 ちちははの顔見るのみの暮れ旅行思うは隔たるときとところよ | 1998.12.21 |
| 3 家を出て二十九年となるなどと考える事もなく過ぎにけり | 1998.12.21 |
| 4 電源を切り替える時の暗闇にぼっぼや父の匂いがしたり | 1999.02.12 |
| 5 「電源の切り替え」という闇に雪降りてしばらく幽玄のとき | 1999.02.12 |
| 6 暖房の匂いか夜汽車に感じたる少年期へと呼び覚ますもの | 1999.02.12 |
| 7 鉄道にまつわる思いでばかりある父は涙にもろくなりたり | 1999.02.12 |
| 8 「機関車の医者」と語りし父なりき今人生の晩年を生く | 1999.02.12 |
| 9 長距離の電話は竊のかかる山朦朧として父入院す | 2000 |
| 10 寒さしるき二月は悲しみ多かりき父よ母よ健やかであれ | 2000.02.24 |

- | | |
|------------------------------------|------------|
| 11 金色の夕陽を残す瞳孔を確かめながら故郷に入る | 2000.03.17 |
| 12 「ふるさと」の優しき響き確かめつつふるさとにいる父母のもと | 2000.03.17 |
| 13 故郷の中に入り行く花薄暮別府湾は静かでありぬ | 2000.03.17 |
| 14 「ラクテレンチ」ふるさとの山に灯りたりあこがれて蹶つ我が少年期 | 2000.03.17 |
| 15 居ずまいを正して聞くべき話あり人の命の危うきことなど | 2000.5.31 |
| 16 入院する父と付き添う母のこと電話に聴きてパツコレ揺う | 2000.5.31 |
| 17 「まだら」なる言葉を知るは梅雨のなか受け留めるべき父に來し惚け | 2000.06.23 |
| 18 都会からの電話の届かぬ田舎なり息子の居場所父は判らず | 2000.06.23 |
| 19 呆け老人二人となりて如何せんもう昔には戻れないのか | 2000.06.23 |
| 20 親族はみな年老いて行くばかり息詰る如き都会に一人 | 2000.06.23 |

21 雨の中メガホンの声高まりぬ要介護二と父母ともに言われ	2000.06.27
22 カメラ向く度に夏帽脱ぐ父は相変わらずのダンディである	2000.9.9
23 高原に父の大きな夏帽子日差しを避けるに充分である	2000.9.9
24 字を書けずになりたる父が真剣にボールペンを動かす暑き日	2000.9.9
25 半生を鉄道と生きしおのこあり花の里にて老年を生く	2000.9.9
26 ゴーギャン展父と巡りて佇めり金鱗湖畔陽の強き日に	2000.9.9
27 ビール飲む父の背後に広される例えようなき由布の山々	2000.9.9
28 八月の長者原にて別れ住む家族がフィルムに焼きつけられぬ	2000.9.9
29 湯布院に父母と遊べり夢のごとこの街は守られ創られてゆく	2000.9.9
30 父に言われ茶碗に耳を付けし昔米は泣くかどうかまだわからない	2000.9.9

- 31 脱帽し一声掛けて改札を抜ける父なり我も真似せり 2000.9.9
- 32 父に受けし教えはまじめに生きることただひたすらに機関車の如く 2000.12.12
- 33 打音検査に亀裂見つける父なりし京福電鉄の事故いかに聞く 2000.12.23
- 34 事故とあらば飛び出して行く父なりし機関車保全にかけし人生 2000.12.23
- 35 うぐいすが清め給える花の里 ちちははに春幾度巡れ 2000.04.28
- 36 道野辺にアザミの咲きて後ろ手に 父母と行くなりしぐれ街道 2000.04.28
- 37 山頭火母の位牌と歩みたるしぐれ街道にわたりの鳴く 2000.04.28
- 38 こいのぼり十五匹戦ぐ青空を背負いし父と見上げし上淵 2000.04.28
- 39 真紅の椿声あげて寄る父母とわれ 2000.04.28
- 40 青木からエネルギー得て又登る 2000.04.28

41 まっすぐに歩けることよ藤の花	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 8
42 鶯と丘の上にて父を呼ぶ	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 8
43 上り坂麦踏む足の父を押す	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 8
44 登りつめれば十五匹の鯉泳ぐ	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 8
45 父母の為しぐれ街道百花繚乱	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 8
46 父の足気になりつつも山笑う	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 9
47 雨降りて父母とこもれるみどりの日	2 0 0 1 ・ 0 4 ・ 2 9
48 俳句ながら八十八夜を父母という	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 2
49 黄と橙のポーピーの中にちちとはは	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 3
50 やまりんどう白秋句碑に低く咲き	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 3

51 雨降り峠白秋句碑に別れあり	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 3
52 久住高原白秋の碑は見晴るかす	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 3
53 立夏来て父母との季節終わりけり	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 6
54 夏立つや父母と別れしワレボックス	2 0 0 1 ・ 0 5 ・ 0 6
55 ちははと湯布院祭りの花火見に	2 0 0 1 ・ 0 8 ・ 1 5
56 父の髭剃りて湯に吹く風涼し由布の山並み雲流れつつ	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 8
57 柿の実の青きが覆うグループホームちははの窓に特に茂れり	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 8
58 爽やかな風に昼寝の父と我風呂上りたる休憩所にて	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 8
59 父の撮りし夏真っ盛りのヌード集引越し荷物の中にあるたり	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 8
60 父の血も母の血もひく曼珠沙華ゆうらりゆうらり揺られておりし	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9

61	せせらぎに癒されている里の秋アルツハイマー直りはせぬか	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
62	父母とあり秋の風吹く里山に今年あることをまずは感謝す	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
63	一両の黄色い電車秋の中通り抜けたりちちははの里	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
64	水清き里の力や父母の秋穂やかな日の続きあれかし	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
65	箸割りて擦る父なり昔より長く続ける癖でありたり	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
66	奥深き葉月となりぬ父母の地に兄妹寄りて過去を巡りぬ	2 0 0 2 ・ 0 8 ・ 1 9
67	両耳を押さえる父の髪洗う グループホームに既に三年	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
68	久大線の一番列車の音がする 鶏も鳴く父母の居る里	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
69	四十年住み慣れた家は無くなりぬ 喋らぬ父よ寂しくあるか	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
70	売られ行く我が家をもう一度確かめぬ 幻のような年月巡り	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9

71 家系図と家紋を最後に持ち出しぬ 今日より他人に渡る家より	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
72 菖蒲咲く湯布院線を走るなり 家の一つが無くなりしあと	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
73 母の日に黒川温泉に泊まりたり 耳聞こえぬ母とむつきの父と	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
74 曲がる胡瓜の曲がれるままに売られけり 父母の家無くなりしかな	2 0 0 3 ・ 0 5 ・ 0 9
75 谷間の初日の出拝む親子かな	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
76 グループホームの窓に昇れる初日の出	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
77 正月やすずめちゅんちゅんひなたぼこ	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
78 正月や親子三人ぬくぬくし	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
79 正月やちちとははと静寂と	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
80 正月の朝日のようにやすらけく	2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1

- 81 谷間の初日の出拝む親子なり 今年も一年健やかでありますように 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 82 グループホームの窓から昇る初日の出拝みしことは健やかなること 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 83 正月やすずめちゅんちゅんひなたぼこ平和というはかくも単純 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 84 正月や親子三人ぬくぬくし 暖房という有難きものも 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 85 正月やちちとははと静寂と過ごすばかりに椿は揺れる 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 86 正月の朝日のようにやすらけく老後の人生広がりており 2 0 0 4 ・ 0 1 ・ 0 1
- 87 目高棲む由布溪谷なるお通夜かな 2 0 1 1 ・ 0 1 ・ 2 3
- 88 百合咲きて死に顔穏やかなりしかな 2 0 1 1 ・ 0 1 ・ 2 4
- 89 花の里咲き盛るとき父は逝く 2 0 1 1 ・ 0 1 ・ 2 4
- 90 天道虫父逝きし日にころり 2 0 1 1 ・ 0 1 ・ 2 4

91 ビール飲む法名釈次郎となる父と	2011・5・25
92 父逝きし父の好みし初鰹	2011・5・26
93 草刈らず父身罷りぬぼうぼうに	2011・5・27
94 山椒魚のように動かざる父なりき	2011・5・28
95 黒南風も加わる父の夜伽かな	2011・6・01
96 甘酒を振る舞う粹な父なりき	2011・6・02
97 芒種なり父の靴下今日も履く	2011・6・6
98 焼き茄子を 吹きて食べたる 父なりき	2011・6・7
99 枇杷の本への引っ掛かり傷や父の顔	2011・6・8
100 雪の下父のようにも孫のようにも	2011・6・10

5月22日（土）父5時14分に父の死去の報を5時24分に主治医から携帯に受けた。

妻と新幹線に乗り17時に由布市に着き19時からの告別式にのぞんだ。

前の日にも検査数字が先週よりも大分悪くなっているという電話を貰って心配していたが翌日に亡くなるとは思って居なかったので連絡を受けた時は一瞬呆然とした。

肺炎が直接的な死因となったが内臓が既にかかなり痛んでいたことも要因となった。

2月に大分に帰って胃ろうを作る判断をした時が会った最後になった。

父は実に穏やかな最期でした。

父の死顔は大変穏やかでした。

5月23日（日）に告別式を行い 火葬場で火葬し 会館に帰ってきて初七日の儀式も行った。

通夜は浄土真宗大谷派の僧侶にお願いし告別式はグループホームの付き合いのある浄土真宗の僧侶にお願いした。

その僧侶は何と由布市唯一の共産党の市会議員で翌日の役場の議会中継テレビでは質問をしていた。

父は文字通り眠るような最後でした。父は実直という言葉が相応しい国鉄マンでした。

私には国鉄のパスを使って一緒に旅行した思い出がいくつかあります

お客さんが居ない時に深く頭を下げてお願いしますと言って改札に入るように何度か言われた事を覚えています。

父は国鉄大分機関区で蒸気機関車の整備をしていました。事故があると夜中でも飛んで行っていました

私の息子におじいちゃんは機関車のお医者さんだと言って鉄道博物館等に連れて行ってくれました。

息子は電車の名前が全部言えるようになるほど影響を受けました。

息子は今車に凝ってますが何かに打ち込む性格はおじいちゃん譲りだと思っています。

思い起こせば母と一緒に出来たばかりのグループホームに入居させて頂いて以来11年間お世話になりました。

今日まで良くして頂いたグループホームの皆さんには大変感謝しております。

おかげ様で穏かいい最後を迎えられたと思います。父は模範的入居者だったようです。

10月に祝う予定だった米寿を迎えられなかった事が残念ではあります。

しかし他の兄妹よりも断然長生きを出来た父は大往生だったと思います。

「お母さんへの親孝行だから短歌は止めるな」と父は言っていました。

その短歌や俳句で偲ばれてきつと父も喜んでいる事でしょう。

有り難うございました。 合掌

2011/7/9(49日の日)に 息子 大津留公彦より

